

本州北部産キイチゴ属(バラ科) の1 新雑種

著者	藤原 陸夫, 阿部 裕紀子
著者別表示	Fujiwara Rikuo, Abe Yukiko
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	62
号	2
ページ	69-73
発行年	2015-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00053577



藤原陸夫¹・阿部裕紀子^{2*}: 本州北部産キイチゴ属 (バラ科) の1新雑種

¹〒 253-0061 神奈川県茅ヶ崎市南湖 6-13-8

²〒 010-0041 秋田県秋田市広面字釣瓶町 167-6(yu.abe1001@gmail.com)

Rikuo Fujiwara¹ and Yukiko Abe^{2*}: A New Hybrid of *Rubus* (Rosaceae) from Northern-honshu, Japan

6-13-8, Nango, Chigasaki, Kanagawa, 253-0061, Japan

167-6, Aza Tsurube-machi, Hiroomote, Akita, 010-0041, Japan

はじめに

本州北部は、周囲が太平洋、日本海そして津軽海峡に面し地理的にある程度まとまった地域である。本州北部のフロラは構成要素により、例えば蝦夷陸奥地域、日本海地域に区分され、さらに太平洋側の南部は関東地域との干渉地帯として扱われており(前川1977)、フロラの比較研究において興味深い地域と考えられる。著者らは本州北部において、メッシュ法を用いた現地調査によるフロラの解明、その結果としての植物分布図作成を進めている。調査対象範囲はおおよそ北緯38度40分以北とし、青森県、岩手県および秋田県のいわゆる北東北3県と宮城県、山形県の北部が含まれる。

2013年6月、青森県六戸町において、一見して葉と花の形質、開花時期がナワシロイチゴ *Rubus parvifolius* L.とサナギイチゴ *R. pungens* Cambess. var. *oldhamii* (Miq.) Maxim. の中間型を思わせ、さらに、両種の形質をもつキイチゴ属植物を見出した(図1A, B)。なお、この両者の組合せによる雑種分類群は、Naruhashi (2001) および邑田・米倉 (2012) に載録されていない。現地において同所的に生育している推定両親種とともに形質を観察し、この植物をナワシロイチゴとサナギイチゴの自然雑種と考え、ミチノクサナギイチゴ *R. × michinokuensis* と名付けた。日本ではキイチゴ属植物の雑種が多く知られており、Naruhashi (2001) は22雑種分類群を認めている。なお、サナギイチゴの学名には北村・村田 (1979)、Naruhashi (2001) に諸説があるが、上記の名を用いた。

新雑種ミチノクサナギイチゴ

一方の親、ナワシロイチゴは温帯ー亜熱帯産で、日本全域・朝鮮・中国・ベトナムに分布する(北村・村田1979)。もう一方のサナギイチゴ(広義) *R. pungens* は種内変異が大きく、中国大陆を中心に5変種が記載されており、サナギイチゴ *R. pungens* var. *oldhamii* は中国大陆のほか台湾、朝鮮、日本を産地としている(Lu 1985)。サナギイチゴは日本では本州、四国、九州に分布している(北村・村田1979)。

本州北部における両親種の分布について、ナワシロイチゴは全域的であり、路傍、草地、林縁など人為の影響が大きい向陽の立地において最も普通に見られる植物のひとつである(図2)。サナギイチゴについては、太平洋側に分布が偏り、隔離的であり、生育立地は向陽の林縁などでナワシロイチゴに類似している(図3)。高度的には両種とも低海拔地から海拔1,000 m付近までの範囲に生育している。

ミチノクサナギイチゴは、2013年6月12日、青森県六戸町折茂のスギ植林地が農道と接する林縁において見出された(図4)。集団の大きさは面積約1×4 mで、有花茎、無花茎ともに数十本確認したが、1回起源の1個体と推測される。なお、周辺には両親種が普通に生育している。

当日は開花中で、図1Aに示したように、ひとつの花序において蕾、開花、花後の各ステージの観察が可能であった。同所的に生育している一方の親ナワシロイチゴは未だ全て蕾の状態にあり、もう一方のサナギイチゴは既に全ての花序が花後の状態であり、部分的には果が成熟していた(図

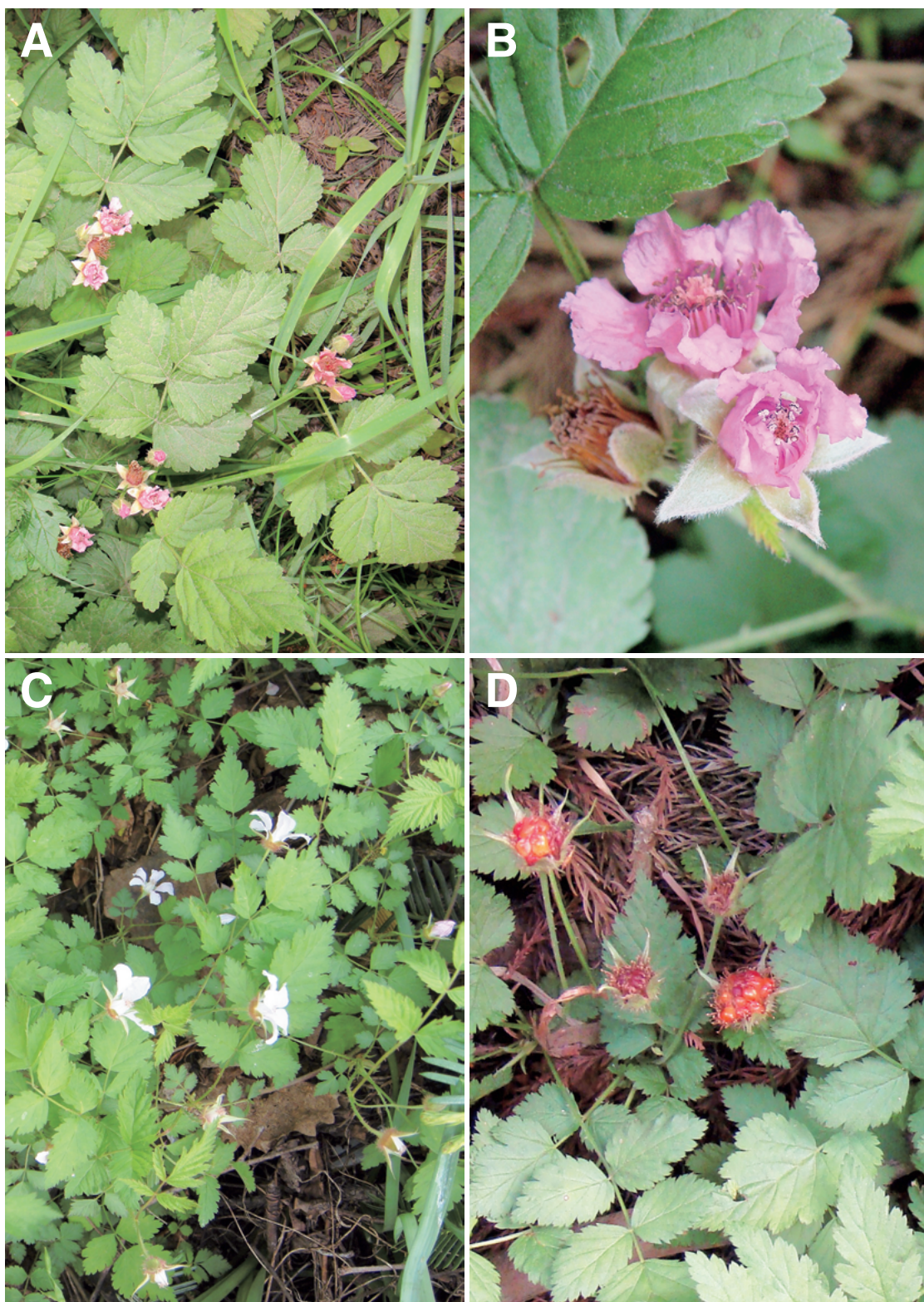
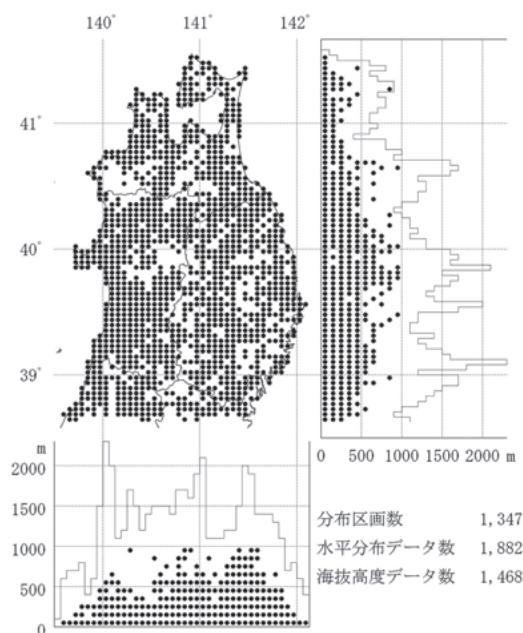
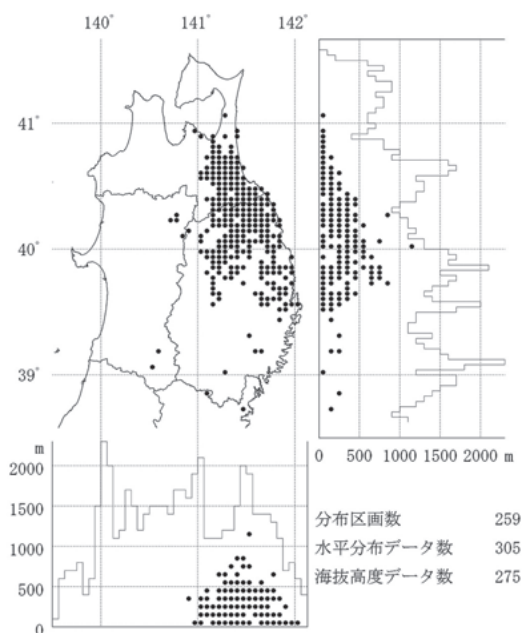
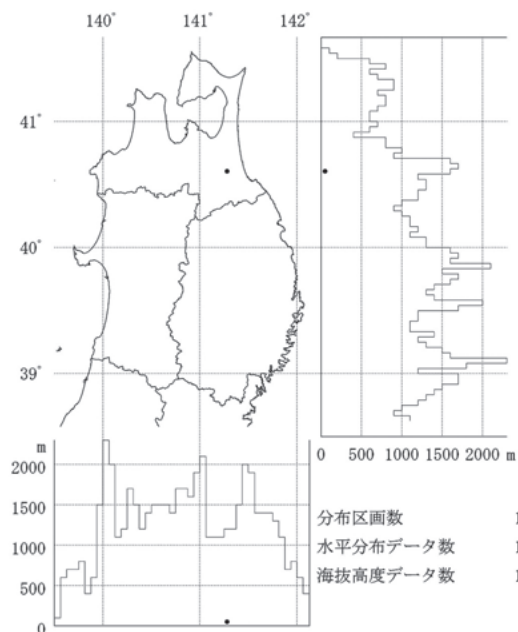


図 1. A,B: *Rubus* × *michinokuensis* ミチノクサナギイチゴ 青森県六戸町折茂 (June 12, 2013)
C: *Rubus pungens* var. *oldhamii* サナギイチゴ 青森県平内町小湊 (May 19, 2012),
D: *Rubus pungens* var. *oldhamii* サナギイチゴ 青森県六戸町折茂 (June 12, 2013).

図2. *Rubus parvifolius* ナワシロイチゴ図3. *Rubus pungens* var. *oldhamii* サナギイチゴ図4. *Rubus* × *michinokuensis* ミチノクサナギイチゴ

1D)。これにより、同一の生育環境における3者の開花はサナギイチゴ、ミチノクサナギイチゴ、ナワシロイチゴの順であることが推察される。

本雑種は、亜低木状で匍匐伸長し、花をつける枝は直立し、長さ20-30 cmで刺があり、若時は細軟毛があるが、成長後はほとんど無毛になる。

葉は5出羽状まれに3出、長さ10-15 cm、葉柄は葉軸とともに刺があり、長さ3-5 cm、托葉は線形、長さ約6 mmで宿存する。小葉は二重鋸歯があり、上面はほとんど無毛で緑色、下面にはやや軟毛があり淡緑色、頂小葉は小葉柄があり、ひし形ないし広卵形でしばしば3裂、先端は通常鈍頭、基部は一般に鈍形で長さ5-7 cm、幅3-4 cm、側小葉は無柄、左右不同の卵形または広卵形、先端は鈍頭または円頭、長さ2-4 cm、幅2-3 cm。小葉数は通常5でサナギイチゴに似るが、図1Aのように生時は上面の光沢が少なく、小葉の先端と鋸歯の形がふつう鈍頭または円頭で、全体的にナワシロイチゴに似た印象を受ける。

花序は散房状に3(-4)花、花の数はナワシロイチゴより少なく、同所的に生育している1(-3)花のサナギイチゴよりは多い。小花柄は軟毛と刺がある。

花の直径は約1.5 cm。萼片は狭卵形で鋭尖頭、長さ7-8 mm、幅2.5-3 mm、外面は密に軟毛とまばらに刺があり、内面にはビロード状の毛がある。

花弁は萼より長く、へら状倒卵形、基部が細まり、長さ10–12 mm、幅6–7 mm、明らかな紅紫色、開花時は斜めに開出、先端は不規則に波打ち著しく縮れる(図1B)。花弁の色、花弁先端の特徴はナワシロイチゴがもつ形質であり、花弁の大きさはサナギイチゴに近い形質である。また、開花時に花弁が斜開する特徴は、短い花弁が雄蕊を囲むように直立するナワシロイチゴと、花弁の上半部が水平に展開するサナギイチゴの中間を示す形質として注目される。この形質は押し葉標本では認識することが困難になる。雄蕊は多数、花糸は無毛、葯は楕円形、低倍率の検鏡では花粉様の物体が観察されるが、稔性は不明である。雌蕊は多数、花柱は糸状、子房には密に白柔毛がある。果は未熟であった。

ナンブサナギイチゴについて

Koidzumi (1936) は、陸中玉山(現岩手県盛岡市玉山区)産の標本により、ナンブサナギイチゴ *R. oldhamii* Miq. var. *borealis* Koidz. を新変種として発表している。因みに「ナンブ」は青森・岩手・秋田県にまたがる南部氏の旧領地の通称である。この植物記載は簡略で記述が十分とはいえないが、全文は「小葉は常に2対;花は幅約23 mm、花弁はへら状倒卵形、長さ11–14 mm、幅6 mm、内側は帯紅色、外側はより白色、萼片は長さ6.5 mm」のように訳出される。分布域として、陸奥(現青森県と岩手県の一部)を付記しており、本州北部産のサナギイチゴの分布(図3)とおおよそ重なっている。

しかしながら、本州北部に産するサナギイチゴについて、生育地における生品の観察や標本の検討をした結果、ナンブサナギイチゴの記述とは一致しない形質が認められた。すなわち、本州北部産のサナギイチゴは小葉が3対(7個)のものがあること、花弁の色については基本的には白色であり、淡紅色の個体は散見されるが、その濃淡は連続的な変異であること、また萼片がより長く、先端が伸長することなどである(図1C)。したがって現時点では、ナンブサナギイチゴとして記載された植物はサナギイチゴの一型と判断した。Naruhashi (2001) はサナギイチゴの synonym として扱っている。

謝辞

分布の図式化に当たり、ご協力をいただいた宮城県仙台市在住の杉山廣雄氏に心からお礼申し上げます。

Rubus × *michinokuensis* Fujiw. & Yu.Abe, hybr. nov., Figs. 1A, 1B, 4.

Rubus parvifolius L. × *R. pungens* Cambess.

var. *oldhamii* (Miq.) Maxim.

Differt a priore foliis quinato-pinnatis raro ternatis, floribus ca. 1.5 cm in diametro, petalis 10–12 mm longis, ascendentibus; a posteriore foliolis apice obtusis vel acutis, calycis angustato-ovatis, acuminatis, petalis plane purpureis, apice irregulariter flexuosis crispatis.

Suffrutex deciduus. Caulis prostratus, aculeatus, junioribus puberulus, adultis glabrescens; ramulis florentibus erectis pubescentibus paucifoliatis, 20–30 cm longis. Folia quinato-pinnata raro ternata, 10–15 cm longa; petiolo 3–5 cm longo; foliolis supra sparse pubescentibus, viridibus, subtus pubescentibus subviridibus, margine duplicato-serratis; stipulis linearibus 5–7 mm longis persistentibus; foliolis terminalibus petiolulatis rhombeis vel ovalibus, saepe trilobatis, apice obtusis vel acutis, basi vulgo obtusis, 5–7 cm longis, 3–4 cm latis; lateralibus sessilibus, inaequi-ovatis vel ovalibus, apice obtusis vel rotundis, 2–4 cm longis, 2–3 cm latis. Inflorescentiae parce corymbosae cum floribus 3(–4); pedicellis pubescentibus, aculeatis. Flores ca. 1.5 cm in diametro; calycis angustato-ovatis acuminatis, 7–8 mm longis, 2.5–3 mm latis, extus dense villosis, parce aculeatis, intus tomentosis, in anthesi reflexis; petalis spatulato-obovatis, unguiculatis, plane purpureis, 10–12 mm longis, 6–7 mm latis, ascendentibus, apice irregulariter flexuosis crispatisque; staminibus copiosis, filamentis glabris antheris ellipticis; pistillis copiosis, stylibus filiformibus, ovariis dense pilosis. Fructus obsoleti.

Nom. Jap.: Michinoku-sanagi-ichigo

Holotypus: Orimo, Rokunohe-machi, Pref. Aomori, Japan (R. Fujiwara & Y. Abe s.n., Jun. 12, 2013, Holotypus in TUS).

引用文献

- 北村四郎・村田源. 1979. 原色日本植物図鑑木本編 II. 保育社, 大阪.
- Koidzumi, G. 1936. Contributiones ad Cognitionem Florae Asiae Orientalis. Acta Phytotax. Geobot. 5: 119–129.
- Lu, L.-T. 1985. *Rubus* L. In: Yü, T.-T. (ed.) . Flora Reipublicae Popularis Sinicae tom. 37, pp. 10–218. Science Press, Beijing. (in Chinese)
- 前川文夫. 1977. 日本の植物区系. 玉川大学出版部,

- 東京.
邑田仁 (監)・米倉浩司. 2012. 日本維管束植物目録. 北隆館, 東京.
- Naruhashi, N. 2001. *Rubus* L. In: Iwatsuki, K., Boufford, D. E. and Ohba, H. (eds.). Flora of Japan II b, Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae (b), pp. 145-169. Kodansha, Tokyo.